

野山に多く有て、土人捕て煮て食す。

〔兔園小説二集〕まみ穴、まみといふけどもの、和名考并にねこまいたち和名考、奇病附録

著作堂主人稿

江戸麻布長坂のほとりなるまみ穴はいと名たゝる地名なれば、まらざるものなし、沾涼が江戸

砂子には、雌狸穴と書きたり、雌狸をマミと訓ずるは、何に憑れるにやまらさず、こは記者のあて字

なるべければ、論すべくもあらねど、貝原が大和本草卷の十六猫をマミとす、略又本草綱目五卷

十一獸 猫の下に、稻若水、和名を剿入してマミとす、略中 益軒若水の兩老翁、或は猫をマミと訓じ、

或は猫をマミと讀ませしは、訛をもて訛を傳ふ、世俗の稱呼に従ふのみ、今按するに、猫は和名鈔

に見えず、猫は和名マミなり、略中 平野必大が本朝食鑑にのみ和名鈔を引きて猫をミと讀めり、

略中 これらの諸説を合はせ考ふるに、近來世俗のマミといふけどものは、ミを訛れるに似たり、

則猫なり、又田舎兒ナカウラは是をミタヌキといふ、その面の狸に似たればなり、いづれにまれミとのみ

は唱へがたきにより、或はマミといひ、或はミタヌキといふにやあらむか、れば麻布長坂なる

マミ穴も、むかし猫の棲みたる餘波ナガリにて、その穴のありしにより、マミ穴と唱へ來れるなりとい

は、いふべし、まかれども猫をミタヌキと云は、よりて來るあり、いかにとなれば、猫はその頭狸

に似たり、ミとのみは唱の不便なるによりて、ミタヌキといふ歟、又猫をマミといへるは、よりど

ころなし、いかにとなれば、猫に眞偽のふたつなければなり、よりて再按するに、かの麻布なるま

み穴のマミは、元來猫の事にはあらで、鼯鼠をいふなるべし、

〔紀伊國續風土記 物産十下〕アノボウ本草 本草和名ニ美、在田 貉ムジナ本草 推古紀ニカツ 右二種在

田日高兩郡にあり、多くはなし、郡にてツチカヒといふ、

〔新編常陸國誌 六十四〕猫ヲ